

## ミヤマシロチョウ保護を目的とした 生息地管理

伊藤雅道(前木曽試験地所属)

(現在の所属：横浜国立大学大学院環境情報研究院)

ミヤマシロチョウ (*Aporia hippia japonica* MATSUMURA) は長野県を中心とする本州中部亜高山帯、標高1,500m~2,000mの範囲に分布するシロチョウ科の1種である。本種は分布が長野県とその周辺に限定されており、乱獲、人工造林、リゾート開発等によって年々減少し、将来の絶滅も危惧されている(レッドデータブックでは希少種に指定)。本研究は本種の生息地を人工的に造成し、導入、保護するための基礎的な技術の開発を目的とした。

八ヶ岳山麓の国有林内(カラマツ人工林30年生)に固定試験地を設定し、試験地の環境がミヤマシロチョウの生息に適するように、①雑木及び成長不良木の伐倒処理、②試験地内のカラマツの枝打ち、③食樹(ヒロハノヘビノボラス)以外の低木類の除去、④蔓類の除去、を行なった。試験地内の食樹の生育状況を把握するために、すべての株に標識を取り付けてほぼ毎年樹高を測定した。新しい株についてはその都度標識を取り付けた。試験地と同じ流域の上流部に位置するミヤマシロチョウの自然個体群について、固定巡回ルートを設定して年1回巡回し、巣数をカウントした(写真1)。



写真1. ミヤマシロチョウの共同巣

食樹の生育に有利になるように試験地内の環境の改善を行なった結果、林内の光環境は改善され、1997年4月には試験地内で自然産卵由来のミヤマシロチョウの巣を1巣発見した。これは、固定試験地の環境がミヤマシロチョウ幼虫の生存に適したものに改善されたことを示している。このことから、生息地を適当な間隔で配置すれば人為的な移動に頼らなくともミヤマシロチョウを自然拡大させることが可能であるといえる。試験地内の食樹の毎木調査によると試験地内のヒロハノヘビノボラスは1996年97本、1998年174本、1999年219本と年ごとに株数が増加しており(図1)、光環境が改善されれば、新しい株が増加するものと考えられる。1998年12月に自然個体群のミヤマシロチョウ2巣を試験地内に移動させたが、そのうち1巣は越冬し、6月上旬まで幼虫の活動が確認された。このことから、少なくとも今回実施した巣移動は越冬と移動先での摂食活動までは成功したものと考えられる。人為移動による定着を今後さらに確実にするためには摂食期(4~6月)の死亡要因を排除する管理(例えば天敵を防ぐ網かけなど)が必要と思われる。

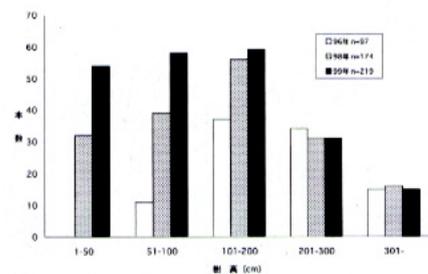


図1. 試験地内におけるヒロハノヘビノボラスの樹高と本数の推移